

平安文学語彙の研究

『竹取物語』における「うるはし」

北村英子

要旨

『竹取物語』は我国で現存する最古の物語文学である。この物語の中に、後世の文学作品において、隆盛を極める「うるはし」という讚美の言葉が七例見当たる。その「うるはし」という言葉の意味・対象・讚美の内容・用法等の諸相について、用例文をすべて抄出し、詳細に研究した。そして、「うるはし」という語の特性を把握し、後世の『源氏物語』や『枕草子』中に頻出する「うるはし」は、どのように発達、転移、変化していくかを知りたく、研究を重ねるところである。また、「うるはし」と近似した美的語詞との比較、共存などについても論じてある。

『竹取物語』に表れるこの七例の「うるはし」のほとんどが、神仙思想の場面に用いられ、中国的語感があることから考え、『竹取物語』の源泉は、チベット地方一帯に伝わる『斑竹姑娘』であるとかつていわれしてきた。この「うるはし」という美感も、この『斑竹姑娘』という作品から流出してきたのかも知れないと思うことしきりで、紙幅の許す限り紐解いてみた。そうすると、『竹取物語』中にみられる「うるはし」を現代語に置き替えると、「美麗」とか「立派」とか「美しい」になるが、その「美麗」という言葉が存在しているのには一興である。

『竹取物語』は「物語の出で来はじめの祖」と『源氏物語』繪合巻に記されている如く、現存する物語文学の始祖である。個性的で独自性を發揮した伝奇的物語において、「うるはし」はどのような姿・形で表れるか。

その意味・対象・讚美の内容・用法等の諸相について追究していく。

「うるはし」の語は『竹取物語』では七例見当たるが、それ等は主人公であるかぐや姫の容姿や容貌の美的表現に用いられているものは全くない。

では、どういう場合に表れるか逐次用例を揚げながら検討していく。

かぐや姫は五人の求婚者である貴公子達にそれぞれ難題を要求するが、その中の一人である、くらのもちの皇子には

「東ひんがしの海ほつちに蓬来ほうらいといふ山やまあるなり。それに銀しろがねを根ねとし、金こがねを茎くきとし、白しろき玉たまを実みとして立たてる木きあり。それ一ひと枝折をりて賜たまはらむ」と言いふ。

ここにいう「蓬来ほうらいの山」とは、『列子』「湯問第五章」によると、

革日、渤海之東、不_レ知_二幾億萬里_一、有_二大壑_一焉。實惟無_レ底之谷。其下無_レ底。名曰_二歸墟_一。八紘九野之水、天漢之流、莫_レ不_レ注_レ之、而無_レ增無_レ減焉。其中有_二五山_一焉。一曰、岱輿。二曰、員嶠。三曰、方壺。四曰、瀛洲。五曰、蓬萊。其山、高下周旋_三萬里_一。其頂、平處九千里。山之中間、相去七萬里、以爲_二鄰居_一焉。其上臺觀皆金玉、其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生、華實皆有_二滋味_一、食_レ之、皆不_レ老不_レ死。所_レ居之人、皆仙聖之種、一日一夕、飛相往來者、不_レ可_レ數焉。⁽²⁾

とあり、中国の想像上の神山である。くらもちの皇子は、玉の枝を取りに行ったようにみせかけ、ひそかに京の作物所で、第一の鍛冶工匠^{たくみ}にかがや姫が要求した玉の枝を一か所も違わず作らせ持っていた。翁はその玉の枝を見て、

① 翁、皇子に申すやう、「いかなる所にかこの木はさぶらひけむ。
あやししくうるはしくめでたき物にも」と申す。

この「うるはし」は、本物そっくりである偽りの玉の枝に対する翁の讚辞である。その玉の枝は、根が^{しろがね}銀、莖は^{こがね}金、実は白い玉で、^{こがねしろがね}金銀玉で照り輝き光彩を放つ、際立った立派な物に「うるはし」は用いられている。

「うるはし」が光る状態の物に関係があることはすでに拙稿⁽¹⁾で記した

が、

故、教の随に少し行でますに、備に其の言の如くなりしかば、即ち其の香木に登りて坐しき。爾に海の神の女豊玉毘売の從婢、玉器を持ちて水を酌まむとする時、井に光^{かげ}有り。仰ぎ見れば、麗^{うるは}しき壯夫^{をとこ}有り。甚異奇しと似為ひき。爾に火速理命、其の婢を見て、「水を得まく欲し」と乞ひたまひき。⁽⁴⁾

(『古事記』)

から端を発し、平安文学に継承されているのである。

また、「うるはし」は、「あやし」を上接し、「めでたし」を下接し、「あやししくうるはしくめでたき(物)」と形容語を三語重ね共用しているが、「うるはし」は、「あやし」を伴うことは、ここ以外に

常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことをり過
ぐさぬ古代の御心にて、⁽⁵⁾
(『源氏物語』「行幸」)

とあり、「ものうるはし」は「妙にきちんとした」、端正さをいう。換言すれば、「うるはし」の程度が一段高くあまり見られず珍しいものの場合に用いる。また本用例の場合、「うるはし」は「めでたし」を連ね「うるはしくめでたき(物)」とし、「めでたし」を強調している。^{こがねしろがねぎよく}金銀玉と照り輝いている蓬来の玉の枝は「不思議なほど立派で素晴らしい(物)」という意味で、視覚で捉えた讚美である。

このような玉の枝がある蓬来山は

② 海の上にただよへる山、いと大きにてあり。その山のさま、高くうるはし。

とあり、海の上にただよつて大層大きく高い、その姿を「うるはし」と讚美しているが、「うるはし」の語義を考える前に、この山の様子をもう少し詳しくみてみたい。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめ

ぐれば、世の中になき花の木も立てり。金、銀、瑠璃色の水、

山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋わたせり。そのあたりてに照り輝く木ども立てり。……………

山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、

と、山は登ることが出来ない程険しい崖で、そこにはこの世の物とも思えない花の木が照り輝いて立つており、金、銀、瑠璃色の水が山から流れ出ている。その川には、いろいろな色の玉の橋が渡してある。

このような山の様は「かぎりなくおもしろし」とあるが、この「おもしろし」は楽しい、美しい、興味を惹く山であるという意を含んでおり、語義は「素晴らしい」と訳すのが文脈上適切であると思える。

さて、このように山の姿は大きく、高く、険しくそびえ立っている。

その山は金、銀、瑠璃色の光彩を放ち、人目を惹きつける程美しく立派なものである。勿論このような山は、「世にたとふべきにあらざりしかど」とあるように、この世の俗界ではなく、神仙界を想像したものである。

こういった山の様子を「うるはし」と讚美している。すなわち、大きく、高く、光りを伴つた美しく立派な物に対して用いられている。語義は人目を惹き立派さを含んだ美、「美麗」と語釈する。

次にかぐや姫が、阿倍の右大臣に結婚の条件として要求した難題は、

「唐土にある火鼠の皮衣を賜へ」

と言っているが、この火鼠の皮衣はそう簡単に入手出来る品物ではない。因に火鼠とは、

ひねずみ〔火鼠〕名 中国の想像上の動物。『和名抄』の引く『神異記』を説明して「箋注」には、……原書に南荒外に火山有り、其の中に不尽の木生ず、昼夜火燃え、暴風を得ても猛からず、猛雨にも滅せず、不尽の木の火の中に鼠有り、重き千斤、毛の長さ二尺余、細きこと糸の如しと云々、其の毛を取りて績紡し、織りて以て布と為して之を用ふ、若し垢澆有らば、火を以て之を焼けば則ち浄まると作る」とある。この皮衣を、火浣布(くわく)という。

とあり、想像上の動物の皮衣を、阿倍の右大臣は、唐土の王けいという商人に大金を渡して買い求めることが出来た。

③ この皮衣かはぎぬ入れたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃るりを色へて作れり。皮衣を見れば、金青の色なり。毛の末には、金の光し輝きたり。宝と見え、うるはしきこと、ならぶべき物なし。火に焼けぬことよりも、けうらなることかぎりなし。

まず、皮衣の入れたる箱を見ると、その箱は、種々の瑠璃るりを、「色へて」作つてあると、「色へり」とある限り、幾種かの色をまぜ合せて彩色してあるものである。したがって、箱に色とりどりの瑠璃るりがちりばめてあるその美しさを、「うるはし」で表現している。

瑠璃るりは普通青色であるといわれているが、

るり 瑠璃るり 流離・琉離なども記す。古代インド・中国の仏像でいう七宝（しつぽう）の一つで硝子（ガラス）をさす。……古墳時代に入って色調も多様化し青色系のほかに黄色・橙色系もみられるようになった。ガラス製丸玉は古墳時代中ごろ以降普及し、複色のガラスを用いた斑点状の模様をつけるトンボ玉。縞状に練り合せた雁木玉も現れた。これらは朝鮮系工人の技術に負うところが大きかったとみられる。……日本古代では水晶を「水精」と記しこれを用いず、やがて瑠璃るりと同義に使用されるようになった。⁽⁷⁾

とあるように、古くは今いう水晶も含めて美しいガラスの類をすべて瑠璃るりといつたのであろう。色相も青色系のほか、黄色・橙色系と多彩なものが普及していた時代であったから、ここにいう「種々の瑠璃るりを色へて作れり」は、多種多様のガラス類の中から、特に上質で人目を惹くような色彩豊かな瑠璃るりをちりばめ作った箱の瑠璃るりを、「うるはし」と讚美している。語義は文脈から考察すれば、「立派な」とか「美麗な」と語釈するのが適切であるが、この場合人目を惹き彩色美が、光彩を放っている状態を視覚的に強く捉えている関係上、むしろ、「美麗な」と語釈するのが最も適切であると思える。

次は、この場面に連繋する場面で、箱の中の皮衣の説明に移る。便宜上再び本文を記すと、

④ 皮衣を見れば、金青の色なり。毛の末には、金の光し輝きたり。宝と見え、うるはしきこと、ならぶべき物なし。火に焼けぬことよりも、けうらなることかぎりなし。

箱の説明の次は、中味の皮衣のことである。皮衣の色は「金青の色なり」とある。「コンジャウ」は諸本多く「紺青」という漢字が当てられているが「金青」の漢字を当てるのが正しいようだ。「金青」とは「あざやかな濃い青色」を指す。すなわち、火鼠の皮衣の色は「あざやかな濃い青色」をして艶がある。そして、「毛の末には、金の光し輝きたり」とあるが、「カガヤキタリ」の個所は、底本によると「サヤキタリ」となっている。

るところであるが、「カガヤキタリ」の誤写として扱われている。恐らくそうであろうから、ここにおいても「カガヤキタリ」として論を進めていく。このように考えれば、火鼠の皮衣の毛の末には、金色の光がしてきらきら輝いているのである。これは他にくらべるものがないほどの宝物である。

阿倍の右大臣が持参した火鼠の皮衣は、人目を惹くあざやかな青色をし、毛の末のところは、金色の光がして輝いている。こういった最高級品で、華麗に目に映える視覚美に対して「うるはし」は用いられている。

また、この火鼠の皮衣は「火に焼けぬことよりも、けうらなることかぎりなし」と続き、「けうらなる」という讚美の言葉に換言しているのは注意を惹くところである。

因に、『竹取物語』の「けうら」について次のよう解されている。

けうら 土井忠生博士は、竹取物語のケウラについて、侵しがた
い気品を備えた美しさの趣を表し、「崇麗」というのに当たると説か
れる(国語国文の研究一〜三号)……清らより高貴さが低いと思わ
れる。⁽⁸⁾

とある。

ここにおいては、「きよら」ではなく「けうら」の方を用いているが、「きよら」より高貴さが低いとは思われない。「うるはし」の美の要素から勘案して、「けうら」は「うるはし」を言い換えたとすれば、ここでは

美の内容からして、「けうら」は「うるはし」と同格で第一級の誉め言葉になる。「うるはし」と「けうら」は、同じような美の特性を包含し、よく共存する言葉である。

さて、本用例文中における「うるはし」は、人目を惹くあざやかな青色のもの、金色の光がしてきらきら輝くもので第一級品に対して、視覚的に捉えた華麗な美をいう。そして、文脈から語義を考えれば、「立派な」がより適切であろう。

「うるはし」は中国的な語感がある讚美の言葉であり、「けうら」も日本文化開花と共に、優美な情趣の中から発見された美とは、性格を異にする美で、やはり異国の美感がする。

右の火鼠の皮衣について、『源氏物語』「絵合」の巻に、

阿倍のおほじが千々の金を棄てて火鼠の思ひ片時に消えたるもいとあへなし。車持の親王……

とあり、

先の「皮衣を入れた箱は、種々の美麗な瑠璃を、色彩美豊かにちりばめて作ってあり、皮衣は金青の色で、毛の末は金色に光り輝いていた」という立派なものを、かぐや姫が見ているには、

⑤ 「うるはしき皮なめり。わきてまことの皮ならむとも知らず」

と、疑念を抱き、この皮衣を、火にくべて焼けるかどうか試してみる。

焼けなければ本物、焼けると偽物ということになる。かぐや姫は真偽のほどを確かめるために火にくべると、その「うるはしき皮衣」はめらめらと焼けてしまった。やはりそれは偽物であった。

こういった話を、先に記したように『源氏物語』の「絵合」の巻に受容しているのは、よほど『源氏物語』の作者はこの話が印象的であったのであろう。

「阿倍の右大臣と火鼠の皮衣」の場面の、三つ目の用例、「うるはしき皮」とは、やはり、視覚的な誉め言葉で、「立派な皮」と訳すのが、最も適切であると思われる。

以上、この場面の三つの「うるはし」の用例から帰納すれば、「うるはし」は、色彩美豊かにきらきら輝く美しいもの。金青の色で金色に光り輝いているものというように、輝くもの・光るものに対して「うるはし」は用いられている。それはいずれも視覚で捉えた立派なもの・人目を惹く美しいものである。「うるはし」の語義は「立派」・「美麗」が最もその意に相当するといえる。

次に「うるはし」が用いられている場面は、「大伴の大納言と龍の頸の玉」のところである。

⑥ 「かぐや姫据すむむには、例のやうには見にくし」とのたまひて、うるはしき屋やを作りたまひて、漆うるしを塗り、蒔絵まきゑして壁かべしたまひて、屋の上には糸を染めて色々に葺かせて、内々のしつらひには、いふ

べくもあらぬ綾織物に絵をかきて、間毎まごとに張りたり。元の妻めどもは、かぐや姫をかならずあはむまうけして、ひとり明かし暮らしたまふ。

大納言は「かぐや姫を住ませるには、普通の住宅の作りでは、みつともない」とおっしゃって、「うるはしき」御殿をお造りになる。それは漆を塗り、壁には蒔絵、屋根の上には、糸を染めて、いろいろな色彩でおおわせて、屋内の設備は言葉ではとても言いあらわせないほどで、綾織物に絵を描き、柱と柱との間毎に張ってある。

このような豪華絢爛たる御殿を、かぐや姫のために準備するのであるが、壁は蒔絵という日本独特の技術を生かした工芸で、金銀粉・貝殻・金具などを用いて造られているため、あたり一面、光り輝いて贅を尽くしたものである。また、屋根の上は、いろいろな色のものでおおって美しいなど、視覚的に人目を惹くような、第一級の美しさ、立派さを「うるはし」で表している。そして、やはり光るもの、輝くものが関係しているといえる。

この『竹取物語』における家造りは、主に屋内の設備を入念に、「うるはしく」造り上げるが、『大鏡』における家造りの「うるはしく」は、

内裏焼けて度々造らせたまふに、円融院の御時のことなり、工たくみども、裏板うらいたどもを、いとうるはしく鉤かかきてまかり出でつつ、またの朝にまゐりて見るに、昨日の裏板うらいたにものすすけて見ゆる所のありければ、

この文面によると、屋根裏に張り付けてある板が、鉋で滑らかに削られている。その上手に削られている大工達の極めて勝れた技量を誉めていることになる。こういった腕前の勝れた大工達が削った裏板の見事さに対して、「うるはし」という讃辞が用いてある。

また、『源氏物語』においても、

東の対どもなども、焼けて後、うるはしく新しくあらまほしきを、
いよいよ磨きそへつつ、こまかにしつらはせたまふ
(宿木)

ここにおいても、焼失した後、建て直した建物の立派さに対して「うるはし」が用いてある。

『竹取物語』はかぐや姫が住む御殿の屋内を、豪華絢爛と設備を入念にし、女性の住まいらしく仕上げ、『大鏡』は焼失した後、建て直した立派な邸宅の一部分、裏板が滑らかに削られている事に対して、『源氏物語』はやはり焼失した後、建て直した建物に対して、いずれも立派な建築に關係のあるものを「うるはし」という言葉で誉めている。

このように検討を加えてみると、「うるはし」はすべて、人工的に勝れているものに対して称讚する場合に用いるものである。即ち、それらは最も勝れた職人達、専門職による技量を伴っているのである。

次は「かぐや姫昇天」の場面で、最後の用例である。

⑦ かの都の人は、いとけうらに、老いをせずなむ。思ふこともなく

はべるなり。さる所へまからむずるも、いみじくはべらず。老いおとろへたまへるさまを見たてまつらざらむこそ恋しからめ」といへば、翁、「胸いたきこと、なのたまひそ。うるはしき姿したる使にも、障らじ」と、ねたみをり。

いよいよかぐや姫は天上界へ帰還しなければならなくなる。かぐや姫の言葉に

「…かの都の人は、いとけうらに、老いをせずなむ。思ふこともなくはべるなり。」

と、月の都の人に対する美表現に「けうら」を用いている。そして、この月の都の人は、「老いをせずなむ」とあるから、年をとっていない若く、汚れない美しい天人を指す。

これに対して翁は、「うるはしき姿したる使」と、この月の都の人を神性視し、崇敬し、「うるはし」と讚美している。この「うるはし」は今の「立派」という意で用いられている。

また、この月の都の人の装束は、「装束のきよらなること物にも似ず」と記され、華麗で汚れない最高に素晴らしい衣装を着用しているのである。

『源氏物語』においても、先学諸賢がすでに、当該個所と類似性を指摘している場面がある。それは、

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし、容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。

(桐壺)

この例文中の「唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ」という個所である。

装束に関しての讃辞が、「きよら」であっても「うるはし」であっても色彩美豊かな華麗で立派なものを指すのであるが、「きよら」を用いている方は聖的な天衣を指すのであるから、清浄美である「きよら」を用いて形容しているのは当を得ている。

そして、この月の都からの立派な姿をしている使者は、夜中の十二時ごろ、満月の明るさを十ほど合せたような光りと共に、大空から雲に乗って、人間界にお迎えに下りて来るのである。

このように検討してみると、この「うるはしき姿したる使」の「うるはし」も、「立派」という意で、光が関係し、神性がある。こうした「うるはし」の内容吟味からして、「うるはし」は中国的な美の特性が認められる。恐らく「うるはし」美は中国が源泉で、日本に渡来した美ではないかと考えるところである。

以上、『竹取物語』の七例の全用例から帰納すると、「うるはし」は、立派さを包含した人目を惹く美しさであり、文脈上、「立派」・「美麗」・「美

しい」などと語積する。そして、想像上のもの、神性なもの、光りが伴うもの・輝く(ような)もの、色彩美豊かなもの、人工的なもの、中国的な美の特性を有するものなど、視覚で捉え讃嘆出来る場合に「うるはし」は用いてある。

これら七例の「うるはし」の場合は、「蓬萊の玉の枝」の個所に二例、「火鼠の皮衣」の個所に三例、「龍の頸の玉」の個所に一例みられるが、これら三個所はすべて神仙思想に関する描写である。その中に六例もの「うるはし」がみられるのは注意を惹く。後の一例は、神性な月の都の使者の姿に対して用いられている。したがって「うるはし」はこういった神仙思想の文中に表れやすく、中国的な美の語感を有している。

『竹取物語』の主人公であるかぐや姫の美的表象に、「うるはし」は一例も用いられていないのは奇異な感じがしないでもない。

ここにかぐや姫に対する主な讃美の表象をみてみることにする。それは、「うつくしうてゐたり」・「かたちのけそうなること」・「かたちの世に似ずめでたき事」・「ひかり満ちてけうらにて居たる人あり」・「たぐひなくめでたく」・「なおめでたくおぼしめさる」・「あてやかにうつくしかりつる事」などが用いられているが、「うるはし」より一段高い美的表現をしているようである。月の都の姫を神女と考えるなら、一流の人物には、より高い最高の美的表現、「ひかり満ちてけうらにて…」などが特に理に叶っているようである。したがって、「うるはし」はかぐや姫には用いなかったと思われる。

終わりに、『竹取物語』の源泉は、チベット地方近辺一帯に伝わる『金

玉鳳凰ぎよくほうおう』という長編説話の中にみられる『斑竹姑娘はんちゆうくうにやん』（竹娘）である、かつていわれてきた。その『斑竹姑娘』の中に「うるはし」に相当する美的語詞があるかどうか検討しておきたい。

○ 在金沙江的左岸、有一塊風景美麗

○ 只是身幹和枝葉上随着他的淚珠增長着美麗的斑点。

○ 女的象牝鹿一樣美麗。

○ 斑竹姑娘鮮花一般的美容

○ 但是、他對美麗的斑竹姑娘不肯放手、

○ 斑竹姑娘見這株玉樹、的確又美麗、⁽¹⁾

とみられるように、讚美の語の種類はあまり表れず、「美麗」・「美容」の語がみられ「美しい」・「みごと」という意味で用いられ、「美麗」がすべての美的表象の代表語であるようだ。したがって、この『竹取物語』の「うるはし」も多く「美麗」に相当する意であるから、古く「斑竹姑娘」辺りから流出してきた美ではないかと考える。

因に、時代が少し下がった作品、『今昔物語集』中に「竹取翁見付女兒

養語第三十三」という話がある。この説話の中に「うるはし」は見当らないが、その語に相当する美的表象は次のようにみられる。

○ 其ノ兒漸ク長大スルマヽニ、世ニ並無ク端正ニシテ、
そ ちごやうや ちやうだい ば ならびな たんじやう

○ 『此ノ女世ニ並無ク微妙シ』ト聞ク。我レ行テ実ニ端正
こ をむなよ ならびな めでた き わ ゆき まこと たんじやう
ノ姿ナラバ、速ニ后ニセン』ト思シテ、
すがた おぼ (12)

とあり、「うるはし」に相当する語は、今まで、「うるはし」の語義の一つに解してきた「端正」という美的表象で表われる。いずれも女を「美しい」と讚美する場合に用いられている。

本稿においては、「竹取翁見付女兒養語第三十三」の小話のみ用例を検討したが、いずれ『今昔物語集』全用例をつぶさに検討してみたく思う。

注

(1) 『竹取物語』の引用本文は以下全て、新編・日本古典文学全集小学館に拠る。

(2) 小林信明著『新釈漢文大系22』（昭和45・明治書院）に拠る。

(3) 北村英子「うるはし」の源流をめぐって—古事記—『古代中世文学論考第十一集』（平成16・新典社）

(4) 『古事記』の引用本文は、日本古典文学全集小学館に拠る。

(5) 『源氏物語』の引用本文は全て、新編日本古典文学全集小学館に拠る。

(6) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』（平成11・角川

書店)に拠る。

(7) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(平成5・吉川引文館)

(8) 木下正雄著『平安女流文学のことは』(昭和48・至文堂)

(9) 北村英子『大鏡』における「うるはし」(平成17・樟蔭国文学
第四十二号)

(10) 『大鏡』の引用本文は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。

(11) 『斑竹姑娘』の引用本文は、野口元大校注新潮日本古典集成『竹取物語』の関係資料に拠る。

(12) 『今昔物語』の引用本文は、新編日本古典文学全集(平成14・小学館)に拠る。

(13) 北村英子『源氏物語』における「うるはし」(『古代中世文学論考
第十五集』(平成17・新典社)

※ その他、池田龜鑑『源氏物語大成』(中央公論)・馬淵和夫監修・有賀嘉寿子編『今昔物語自立語索引』(笠間索引叢刊39)・馬淵和夫監修『今昔物語集漢字索引』(笠間索引叢刊40)・上阪信男編『九本対照竹取翁物語語彙索引・本文編・索引編』(笠間索引叢刊75)等を使用した。

※ 引用本文については、ルビ等を省略した箇所がある。

付記

本稿は、平成十七年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費による研究の成果である。